

『四万十川を育む森』の山守 = 森林ボランティア “四万十^{きこり}樵塾”

清流通信読者の皆様こんにちは。

四万十川源流点のある津野町、不入山（いらすやま）。今回はこの不入山と四万十川流域の山守たち“四万十樵塾”の皆さんの話です。

森 四万十川源流の山“不入山” 森

標高 1336m、四万十川源流点のある不入山。山頂付近には樹齢 200 年に近いツガ、ヒノキ、ヒメシャラなどの天然林が鬱蒼と茂りここに降った雨はやがて 196km の四万十川の大河を下る。不入山の名前通りに土佐藩の「お留め山」（*1）であったこの山は、長い間人々の入山を拒み続けてきた。それ故に今も豊かな自然林を抱え、四万十川にその清流の源を送り続けている。

先日、11月21・22日の両日に、この不入山山腹の人工林で、(財)四万十川財団主催の森林ボランティア養成講座『第6回四万十樵養成塾』が7名の参加者を迎えて開催された。その新人樵の間伐(*2)の指導・補助をしたのが、樵集団『四万十樵塾』の面々である。

森 川を育む森林を守る為に 森

県土の84%が森林に覆われる“日本一の森林県”高知県。県西部四万十川流域には、それを上回る約90%の森林が広がっている。そしてその深い森林があったが故に、清流四万十川が守られてきたことを、流域に暮らす人々は誰でも知っている。しかし近年、その川の生命の源となる水を育む森林が、木材不況や農山村の過疎化等により、適切な管理がされず、放置され荒廃してきている。保水力の衰えた山は、かつてのように清流を守れなくなっていることも、一方では事実としてあるようだ。

そこで四万十川財団では、2001年より清流四万十川を育む流域の森林を保全する為、山林技術者を育成する『樵養成塾』を開催し、今までに合計41名の新人樵を送り出してきた。

森 四万十樵塾の誕生 森

2002年12月、その樵養成塾第一・二期生が中心となり、『四万十樵塾』が誕生した。『本会は、主として四万十川流域において、森林整備が遅延した森林を対象とし、間伐等の森林施業を適正に推進し、水源涵養、土砂流出防止等、良好な森林環境の維持、保全に努めることにより公益の増進に寄与することを目的とする。』

(四万十樵塾会則、目的より)とあるように、本業を別に持つ彼らは、『余暇を有効活用した安全な四万十の森づくり』をめざし、月一回以上のペースで、主にチェーンソーを使っての人工林の手入れ(間伐作業)をしている。現在の四万十樵塾メンバーは18名。ほとんどが流域外の高知市や県外などからの参加である。森林県高知には、現在登録されているもので30以上の森林ボランティアグループが存在するが、このように広範囲からの参加は珍しい。

森 更なる高みを目指して 森

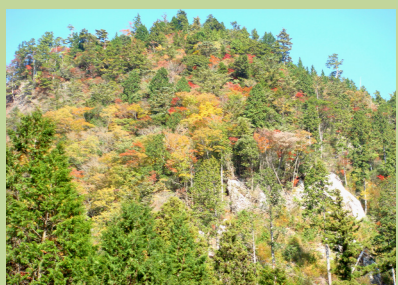
この秋、四万十樵塾は農林水産省四国森林管理局主催の「四国山の日賞」森林整備分野を受賞した。受賞の理由には、『会員のほとんどが都市部からの参加で、人工林の間伐を継続して行い、間伐材利用のマイ箸づくり教室にも取り組んでいること』があげられ、切り残された木材も有効利用しようとする活動も評価された。「この受賞を励みに、山の手入れを通じて、今まで以上に四万十川の清流保全に貢献したい」と、事務局長の秋森稔氏は意欲的だ。

「四万十川には大勢のファンがいます。“他にもっと水質の良い川がある”という人もいるが、懐の深さでは右に出るライバルはいないでしょう。深い懐は、大勢の人達の知恵と行動力と団結が、川や流域の自然を大切に育てているからだと思います。」四万十樵塾副会長 松岡正宣氏はチェーンソーを片手にそう語ってくれた。

人々を惹き付けてやまない四万十川。日本全国の川がダム建設や護岸工事などで、その自然の景観を失ってきた中で、この川は川本来の姿を今にとどめているという。実はそこには、関わる多くの人々の努力があったということ、そして今もこれからもあることを、チェーンソーを巧みに操り間伐をする樵塾のメンバーに見た気がした。



四万十樵塾は「四国山の日賞」森林整備分野を受賞



晩秋の不入山



*1 お留め山；江戸時代、山林保護のため狩りや伐木を禁じた山。

*2 間伐；森林・果樹園等で、主な木の生育を助けたり、採光をよくしたりする為に、適当な間隔で木を伐採すること。